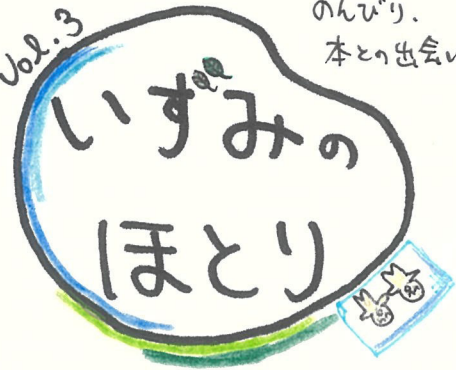


Vol.3

のんびり、
本との出会い。



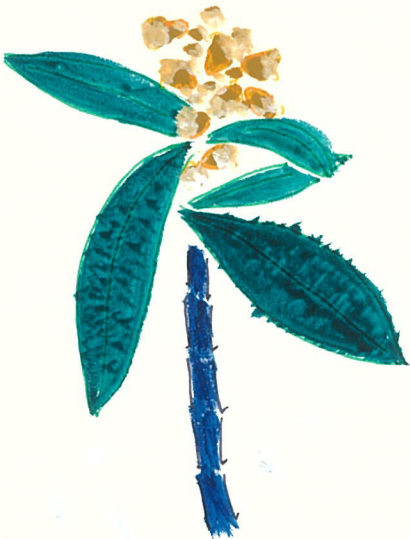
本の花束

Take Free

制作:

- 中川倫太郎 (東京科学大)
 - 山原和葉 (同志社大)
 - 伊瀬知美央 (熊本大)
 - 庄司春菜 (東京薬科大)
 - 中村珠世 (京都大)
 - 久次米桜保 (京都大)
- Special Thanks:
齊藤ゆずか
(京都大・大学院卒業生)

不思議な おばあさん



道端の草花にも目を



変幻自在の洞

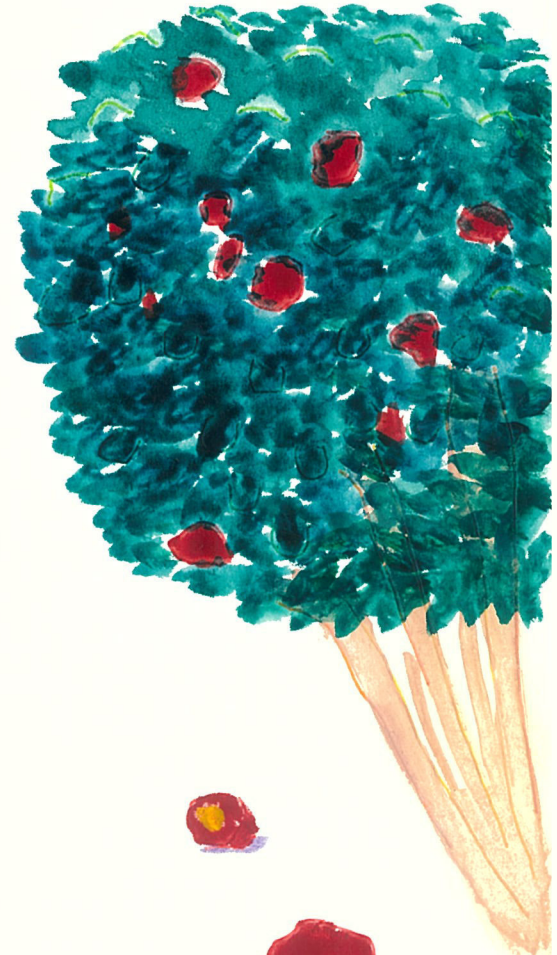
便利になりすぎた

今だからこそ



溶かすように
春が雪を

カズミヤナギ



花はいつか
枯れる



『デヴィッド・ボウイ増補新版』

(野中モモ/筑摩書房)

あまりにも有名でだからこそ耳を貸さず通り過ぎてしまうアーティストのなかにデヴィッド・ボウイはいた。あるドキュメンタリー映画で“Heroes”を歌う彼を偶然目の当たりにして僕は一目惚れしたわけだけれど、この本は読む音楽があり、聴く歴史として、**変幻自在の渦**に我々を呑みこむ。(中川)



『ミス・サンシャイン』

(吉田修一/文藝春秋)

花はいつか枯れる。しかし、枯れ方にもその美しさが表れると思う。男子大学生の心は、バイトとしてかっつての銀幕スター・鈴さんの身の回りの世話をする事になる。彼女の幕の閉じ方は、椿のように美しいままだ。あなたにもこの終焉を見届けてほしい。(中村)



『植物図鑑』

(有川浩/幻冬舎)

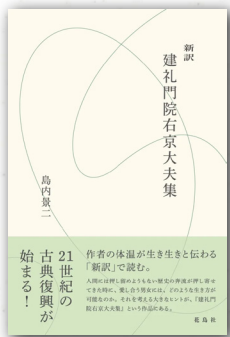
中学時代むさぼるように有川浩さんの作品を読んでいた。やさしくて、面白くて、そして何よりもキュンキュンした。そしてこの作品は有川さんの作品のなかでも特に大好きな一冊。普段何も気にせず通り過ぎている**道端の草花**にも目を向けたくなる。(山原)



『おそろし 三島屋変調百物語事始』

(宮部みゆき/KADOKAWA)

ある事件で心を閉ざしたおちか。江戸の三島屋で客のふしぎ話を聞くうち、**春が雪をこすおに**に心もほどけていく。この世のものならざるものの不条理さと人の谷次や業が垣間見える。怪談好き、時代物女子き、人情噺女子き、みんな大満足の一冊。(久次米)



『新訳 建礼門院大夫京集』

(島内景二/花鳥社)

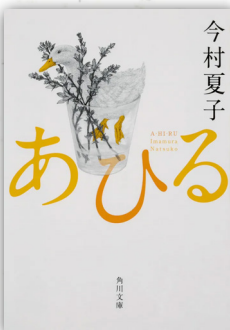
便利になりすぎた今だからこそ感じてみたい。言葉が胸に染みこんでくる。混沌とした、夜明け前の時代を生きた人の物語。泥だらけのまま、人を愛し、争い、怒り、喪失感に沈んで前へと歩いた人の姿はまっさ、あなたの心の拠り所となる。(伊瀬知)



『マチネの終わりに』

(平野啓一郎/文藝春秋)

この物語には、**人生を揺るがす力**がある。ギタリストとジャーナリストが恋に落ち、迷いながら選んだ道の先で再び出会う。人を深く愛するためには、自分や目の前の世界に同じだけ深く向き合わなければならぬ。幾重もの花びらを一枚一枚開いていくような読書だった。(斎藤)



『あひる』

(今村夏子/角川文庫)

あひるの「森の兄妹」という物語。学校で小さな出来事が起き、兄は妹とともに森へ通うようになる。びわの木の実を食べるおいしそうな描写が印象的で、**不思議おばあさん**との交流が静かに心に残る作品だ。兄妹が森の中を歩いたり走ったりする様子が心地よい。(庄司)



「いすみのほとり」とは……

大学生協が発行しているフリーペーパー『読書のいすみ』。本や、本を通して生まれるさまざまな人・世界との出会いを発信していきます。作家や編集者、研究者の方への取材記事から、学生スタッフのエッセイ、おすすめの本を紹介するコーナー、などなど…。そんな『いすみ』をもっと知ってもらいたい、いすみの編集委員の学生がおくる、手書きのミニ冊子です。もと本と身近に感じる、きっかけづくりができればなと思っています。!



感想をぜひ
←寄せてください

『いすみ』紙版
のWeb版
はこちら
→

